

目次	■第18回年次大会特集	2
	大会を振り返って…2 基調講演…5 特別講演 DMISセミナー…14 プレカンファレンス…16 20周年記念事業シンポジウム…16 パネル・ディスカッション…17 石井米雄奨励賞…18 第19回年次大会…18	
	■2019年度理事会議事録抄録	19
	第1回理事会…19 第2回理事会…20 第3回理事会…21	
	■地区研究会報告	23
	北海道・東北…23	
	■地区研究会案内	24
	関東…24 中部・関西…24 中国・四国…25 九州…26	
	■お知らせ	27
	Web管理・広報委員会より…27 学会誌編集委員会より…27 学術委員会より…28 事務局より…28 会員新著紹介…29 新入会員紹介…29 NL委員会より…30	
	■編集後記	30

CONTENTS	■Report on the 18th Annual Conference on Japan Society for Multicultural Relations	2
	Overview of the 18th Annual Conference on Japan Society for Multicultural Relations…2 Keynote Speech…5 DMIS Seminar…14 Pre-conference…16 20 th Anniversary Memorial Project Symposium…16 Panel Discussion…17 The Ishii Yoneo Award…18 JSMR 2020 Annual Conference…18	
	■Records of the 2018 Board Meetings	19
	■Reports from the Regional Study Meetings	23
	Hokkaido・Tohoku…23	
	■Announcements on the Regional Study Meetings	24
	Kanto…24 Chubu・Kansai…24 Chugoku・Shikoku…25 Kyushu…26	
	■Announcements	27
	From the Web Committee…27 From the Journal Editorial Committee…27 From the Academic Affairs…28 From the Business Office…28 New Publications…29 Introducing New Members…29 From the News Letter Committee…30	
	■Editor's Notes	30

多文化関係学会第18回年次大会（於東京未来大学）を振り返って

第18回年次大会委員長 山本 志都(東海大学)

全体の総括

「相対主義のジレンマの先へ:多文化シナジーの実現に向けて」をテーマに東京未来大学で開催された第18回の年次大会は、DMISセミナーと基調講演という2つの企画にご協力いただいたMilton Bennett先生、ご発表ならびに司会にご尽力をたまわりました先生方、ご来場いただいた参加者の皆さま、そして準備委員会委員の先生方と東京未来大学田中ゼミの学生の皆さまのおかげをもちまして、盛会のうちに終えることができました。改めて心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

会員67名、非会員34名、計101名もの方にご参加いただき、プログラムの最後にあたる基調講演まで60名以上の方が残ってご参加下さりました。非会員の参加者数としてはおそらく過去最多であり、多くの方に高い関心を持っていただくことができました。今回はシンポジウムでもパネル・ディスカッションでも、来場者参加型でシナジーを生み出す新しい試みを行うこともできました。時期的には11月中旬は他学会の大会や入試業務の最中にあたり、残念ながら参加できなかったとおっしゃる先生方も多く、ニュースレター掲載の報告書で少しでもお伝えすることができればと思います。また、パネル・ディスカッション、DMISセミナー、基調講演についての資料等は、大会ホームページでもご覧いただけるようにしております。お時間のあるときに訪問してみてください。

<https://2019tabunka.wixsite.com/conference>

プレカンファレンスは本学会の現会長である田崎勝也先生による「Etic的な態度とEmic的なスキルの2側面から異文化コミュニケーション力を測定する」のセミナーでした。田崎先生による研究法のセミナーはいつも人気が高く、今回も大勢の参加者がメモを取りながら集中して話に聞き入っていました。また、田崎先生のご指導によって博士論文を書き終えたばかりの申知元先生も加わってご発表下さりました。



田崎先生・申先生



ポスターセッション

土曜日の研究発表は発表数も多く、質的研究と量的研究そして理論研究と多種多様な発表のあるところも多文化関係学会らしく、各教室で活発な意見交換が行われました。ポスターセッションでも、集まった参加者と発表者が盛んに発言を交わって賑わっていました。



ハッピーアワーでの乾杯



田中先生

受付:岡部先生・赤崎先生・馬場先生・横溝先生

DMISセミナーでは「New Theoretical Implications of the DMIS: Co-ontogenic Perception and Quantum Measurement (DMISの新たな理論的含意: 共同発生的な知覚と量子論的観測)」と題してMilton Bennett先生がお話されました。Bennett先生は私のPortland State University大学院での恩師なのですが、同じ院の先輩にあたる中川典子先生が詳しい解説を加えたすばらしい報告書を書いて下さりました。どうぞそちらをご覧ください。

DMISセミナーの後は1時間程度のネットワーキングパーティ、「ハッピーアワー」でした。飲み物とスナックのみの形式でしたが、気軽にたくさんの方に参加していただくことができ大変好評でした。その後は北千住の居酒屋で「居酒屋交流会 with Bennett」を行い、おいしいお料理と尽きることのない会話で大いに盛り上がりました。



居酒屋交流会 with Dr. Bennett

日曜日は20周年記念事業連続シンポジウム、パネル・ディスカッション、基調講演と、3つの大きなプログラムによる構成でした。シンポジウムは「共生って何? ~文化研究にできること」と題し、藤美帆先生と岡部大祐先生をファシリテーターに参加者が共生の事例を出し合い、活発な議論と意見交換によってシナジーを生み出す場となりました。

いたキラリと光る発想を大会HP上で公開しています。そして大会ラストを飾る基調講演

「Reconciling the Dilemmas of Intercultural Consciousness: Constructing Self-Reflexive Agency [Metaconsciousness]

(異文化間意識のジレンマを調和させる: 自己再帰的エージェンシー [メタ意識] の構築)」では、まずBennett先生が講演をされ、それを受けてコメントーターの鳥飼玖美子先生が問いを投げかけ、お二人のスリリングな対話の時間が始まりました。詳細はBennett先生と公私にわたり長年のおつきあいがあるRichard Evanoff先生が英語版を、Bennett先生に熱心に質問されていた三河内彰子先生が日本語版の報告書を、それぞれご執筆下さいましたので、そちらをご覧ください。基調講演のPPTスライド資料と報告書は大会HPで公開しています。

パネル・ディスカッション「多文化関係学と私とのつながり: 研究・教育における具体的な展開」では、4人のパネリストからの発表に続き、来場者も参加して「ブレイン・ライティング」セッションを行いました。ブレイン・ライティングとは発散的思考によるアイデア出しのディスカッションで有名な「ブレインストーミング」の無言書き込みバージョンです。参加者一人一人が過去をふりかえり、そして未来を見据え、相互に刺激を与え合いながら発想しました。グループで選んだいた



20周年記念事業連続シンポジウム



パネル・ディスカッション
馬場先生、抱井先生、松永先生、岡部先生

基調講演より: 相対主義のジレンマの先へ

Bennett先生の基調講演について、私からは、「相対主義のジレンマの先へ」という本大会のテーマに関する部分だけをご紹介します。Bennett先生は、あるコンテキスト上に成立する集団を「善し悪しでなく違い」として考える相対主義によって、それまで周辺化されていた集団の文化が尊重されるようになり、それが過去半世紀を支えてきたと述べました。しかし「集団である以上はどの集団でも尊重されるべき」と、悪意ある集団の主張にまで利用されるようになったことを指摘した上で、2つの選択肢の可能性を提示されました。1つは、ある種の絶対主義に後戻りし、独裁的指導者にありがちな「私に考えを委ねなさい」という言葉に乗ってその原理を支持すること。



Bennett先生・鳥飼先生

もう1つは、このように変化してきた現代における次の適応の策として、意図性とエージェンシーを高め、「メタ意識」を機能させる構成主義パラダイムへ移行することです。メタ意識とは、意識に対して意識的になることや、意識することに自覚的になることであり、メタ意識を行使することによって、私たちに新しい世界の構成を可能にさせる点が強調されました。そして、メタ意識で自己も他者も私たちが生み出した産物であることに気づくと、自分が誰かを定義づける選択に自由が生まれ、それと同時に、自分が自分を定義づける境界化により他者化される誰かに対する定義づけにも責任が生まれるということが述べられました。境界の線引きと選択に関し、Bennett先生は「図地 (figure-ground) の分化」を挙げ、何かを焦点化し注目するとき、背景に埋もれて注意を払わなくなる何かが生じる話をされました。その分け方、および、それにもとづいた経験の仕方を集団レベルでとらえると、相対主義でなく構成主義アプローチによる文化間比較のできることは、1つのポイントになるでしょう。私自身の解釈も交えて説明すると、「ある集団と別の集団では異なる価値観がある」というのは相対主義ですが、「2つの集団では集散的に合意している選択が異なり、

それゆえにその選択をベースに展開するストーリーや構成する現実、およびその経験も異なる」と構成主義で考えてみます。その選択が変わると、経験も変わります。現在の現象は私たちの選択によって構成されていることを意識化し、その選択に影響を与え制約を加えている制度や枠組みなどについても、BergerとLuckmannの言うところの「物象化(人が作ったにも関わらず、そのことが意識から抜け落ちて元からそうであるかのように扱うこと)」させてしまわないことを意識し、異なる選択の可能性に私たち自身を開くと同時に、共に今の境界を調整し再構成する方向へ向かうことが肝要と言えるでしょう。

Bennett先生の着眼点は私がPortland State Universityの大学院生だった30年前から変わっていませんし、量子論も構成主義も以前から知られた理論です。それが今の社会で重要な意味合いを強めているのは、私たちがあまりにも客観主義ベースの教育による実践に慣れすぎて、構成主義を理解していてもそのパラダイムによる実践への転換が難しいことにも理由の一端があると思われます。



石黒先生・山本先生・Bennett先生

サステナブルな異文化感受性

最後に「サステナブルな異文化感受性とは」でこの振り返りを締めくくりたいと思います。一言で言うなら「釈迦に説法 (preaching to the choir) をすること」、つまり、あなたにすでに賛同してくれている人たちをより良くすることだとBennet先生は述べられました。そして、反対する者を転向させる努力は無駄になりがちで、自文化中心主義的な人びとを変えようとしてもDMISで言うところの「防衛」を「最小化」にできる程度であるならば、そのことで消耗するより、文化相対主義的な人びとを支援し、メタ意識のレベルを行使できる人びとの「クリティカル・マス」(この流れの起爆剤となるだけの数)を得るべく努力すべきであると訴えました。私たちが目指すべき方向性のあることを信じるならば、自分自身の意識の質を高めることに時間を費やし、その方向性に向かうための強い勢力となる方がよいとおっしゃっていました。

参加者からの「転向させることができないのなら、何から始められるか」という問いに対し、Bennett先生は、Portland State Universityでかつて増加する留学生数に対して教員に留学生アドバイザーのできる者が少ないことが問題になったとき、各学部の教員を集めた研修を依頼された話をご自身の例として挙げられました。わずらわしさを感じてやりたがらない教員たちを説得し、留学生アドバイザーの役目に同意する者の数を増やすことが目的だったそうですが、Bennett先生は、教員一同を集めた研修の代わりに、すでにその時点で留学生と働きたいと思っている教員だけを

集めた研修を行うべきと提案しました。そして、各学部へ行きそういった教員を探すと、1人か2人くらいは見つかったので、その人たちを集めたセミナーを始めたそうです。それから3~4週間すると、「どうやったらそのセミナーに入れるの?」と尋ねる教員が出てきたことが鍵となりました。留学生と働く意向を持つ人たちだけを対象にしたこと、その人たちが留学生アドバイザーをより良くできるようにしたこと、これらによって、その能力におけるある種のエリート的な存在が生み出され、それが「留学生アドバイザーになることを考えてみてもいい」程度には思っていた他の人びとにとって、魅力的に思えるようになったのです。学期の終わり頃には、留学生アドバイザーになってもよいと思うだけでなく、うまくアドバイスできる人が各学部で大幅に増えたそうです。

もう少し広げて考えてみると、私たち自身が自分を磨き、仲間を手助けして共に成長することによって、社会の中で目に見える存在となると、そのことに少しでも関心のある人の目に留まるようになり、それが今の流れに作用する力を生み出すことによって、別の方向への流れを推進し、その流れが強まると、いつしかひとつの時流を生み出すことにもつながっていくのではないかと思います。そのときは、反対していた人びとの中からも、その流れに加わる人びとが出てきて、人を変えようとしなくても変わることを期待できるのではないのでしょうか。最後まで多くを考えさせられた今年の年次大会でした。来年度の展開もまた楽しみにになります。

▶ 第18回年次大会特集

基調講演

Reconciling the Dilemmas of Intercultural Consciousness : Constructing Self-Reflexive Agency

【講演者】ミルトン・ベネット 氏 Dr. Milton Bennett (IDR Institute)

【コメンテーター】鳥飼 玖美子 氏 (立教大学)

【司会】山本 志都 (東海大学)

「Reconciling the Dilemmas of Intercultural Consciousness: Constructing Self-Reflexive Agency (異文化間意識のジレンマを調和させる: 自己再帰的なエージェンシー[メタ意識]を構築する)」に参加して

背景: 相対主義の次の段階へ

今回、山本志都先生より基調講演の報告書の執筆依頼を受け、改めて学会企画の趣旨についておさらいをした。事前のウェブサイトでのお知らせには、2017年の本学会関東地区研究会でDr. Milton Bennett (以下、ベネット先生)を招いた講演会の続きを聞くこと、前回の終わりに相対主義の次の段階について話が及んだことが挙げられていた。この、「相対主義の次の段階」というのは今回の多文化関係学会のテーマである「相対主義のジレンマを超えて」であり、今回の基調講演は、ベネット先生が本テーマに答える形で話を展開し、ジレンマに対峙している参加者一人ひとりが、日々の活動を省み、明日からどう取り組むか考える機会を与えてくださったといえる。



三河内先生・Bennett先生

本基調講演は単独でも成立するが、前日に開催されたDMISセミナーの続きともいえる。セミナーでは、司会を務められた山本先生曰く、ベネット先生は30年前からすでに同じ構想があって話をされている(始まりは1972年の国際基督教大学での会議、そして1986年に発表)。しかし、当時は異文化間コミュニケーションが相対主義に基づく「適応」という文脈で話された。今「構成主義」が異文化間コミュニケーションで語られるようになったからこそ再度ご招待したと。この言葉が異文化間コミュニケーション論のこの30年の変化を象徴しているように感じた。

では、相対主義と構成主義では具体的に何がどう違うのだろうか？ 現在の社会において異文化間コミュニケーションを構成主義的に捉える意義とは何なのか？ どうすれば自己や他者の文化を構成主義的に捉えられるようになるのか、また、教育をどのように行えばよいのか？ 様々な疑問を持つ基調講演の参加者に対して、基調講演の副題「自己再帰的なエージェンシー[メタ意識]を構築する(Constructing Self-Reflexive Agency)」が欠かせないポイントとなる。以下の報告でより詳しく触れるが、メタ意識(Metaconsciousness)とはメタレベルで自覚的に自己再帰的になることである。メタ意識を行使することで、文化が人によりつくられたことに気づき、異文化集団に属する人々が互いを再構成しあいながら世界で共存し得る新たな道を構築する可能性が開けることが強調された。

しかし、相対主義的なアプローチから構成主義的なアプローチをとることは、理論として理解できるとしても、実行するとなるとたやすいことではない。だからこそ、ベネット先生の話は、個々の文化の内容よりも、文化をとらえるために、まずは現実のとらえ方、人の意識や経験などに始まり、凝縮した内容は多岐にわたった。冒頭、この意識、つまり、自己という感覚を持つにいたった自己再帰的意識としての意識が、人類に初めから備わっていたわけではなかったという知見からスタートした。驚いたことに、人類史の大部分を、人はその意味での意識を持たずに生きながらえていたという。これを聴くと、先天的ではないからこそ、意識的になることに注意を払わなければいけないと思わされる。流れるような名講演の後、コメンテーターの鳥飼玖美子先生との問答が、さらに内容を解きほぐし、理解を深化させ、今後とるべき行動へと橋渡しをしてくれた。以下の報告では、講演後の鳥飼先生や聴衆のやり取りを鑑み、ベネット先生ならではの指摘で心に残った点として、構成主義的なアプローチになぜメタ意識が必須であるのかという点と、そのことで相対主義のジレンマをどう乗り越えられるのかに焦点を絞って報告を行う。

相対主義がハイジャックされた

そもそも、今まさにジレンマを生じさせている相対主義がエドワード・ホール(Edward T. Hall)によって文化比較に持ち込まれた背景こそ、現在に通じる異文化間コミュニケーション(intercultural communication)での困難が存在しており、ひいては他者とお互いの経験を共有するにはどうしたらよいかという、文化を超えた経験の理論への突破口が期待されていると言える。ベネット先生はホールが異文化間コミュニケーションの創設者の一人であり、それ以前の西洋至上主義の文化比較(前日の話から引用すると、西洋をより文明化した文化と優位付け、唯一の基準とみなすために、他の文化はそれより劣るものとして比較していたことを挙げている)に対して、西洋も含めあらゆる集団に独自のコンテクストが存在し、異なるコンテクストに異なる文化があると理解できる文化相対主義(cultural relativism)という新たな視点をもたらした。

個々の集団の文化が善し悪しでなく違いとして尊重されて50年、ベネット先生の言葉を借りると、今まさに相対主義は「ハイジャックされている」という。本来は、西洋中心主義によって周辺に追いやられていた存在を尊重するための視点であったが、尊重するほど[独立した存在となり]、たとえ相手を憎むような集団であっても、違いは認められなければならないとして権利を主張するようになった。この相対主義の乗っ取りはホールの当初の意図とはかけ離れた状況[集団間での断絶、互いの文化に入っていくようなことができない状況]が生み出された。

ベネット先生曰く、この状況では独裁的な「私に考えを任せなさい」という指導者にゆだねて絶対主義にもどるか、この世に存在することに意識的になり、意識することに自覚的になることで、新たな道を構築する構成主義的なパラダイムへ前進するか、のいずれかの2択だと。ベネット先生は後者のメタ意識を行使することで開ける可能性を強調された。

つまり、そもそも自己も他者も私たちが生み出した産物であり、その構築のプロセスがあったことにメタレベルで気づくことができると、自分が自己を定義できる自由を得られ、それと同時に、他者は「自分以外」という自分との関係から定義されていることも認識できるようになる。結果、他者の定義にも自身に責任があると自覚できる。その関係性に気づくことで相対主義の名のもとに自己と他者を分けてしまった異文化間コミュニケーションを見直し、新たな方向性へ進むことができるということなのだ。

ここでベネット先生は、冒頭で紹介した意識の起源の研究を行ったジュリアン・ジェインズ(Julian Jaynes)の研究から引用して、メタファーとしての私(me)という考えを作り出したことで、meの行為主体となれる私(I)を獲得し、さらに他者に対し人間同士とみなせる視点を得たという点を挙げた。このプロセスは、互いが互いを作りあう関係を生む。ジェインズは、逆に自己を意識しないように抑制することも可能であり、そうすると自己は無意識に陥り、他者の抑圧を引き起こす可能性も示唆している。先ほどの「私に考えをゆだねなさい」という独裁的な指導者は、複雑で困難な社会ではとかく支持されがちであり、実際にそのような指導者が存在するが、考えをゆだねるということは、自己抑制に陥るということなのだ。意識を止めるということは非常に危険な状況をまねくということが強調された。だからこそ、そうならないようにメタ意識を発達させる必要がある。

モノに名を与えるという行為は、与えなかったモノにも名を与えているという行為

自己の定義は、同時に自己と自己以外との間に境界を引いていることを忘れてはならない。ベネット先生はジョージ・スペンサー＝ブラウン(George Spencer Brown)から引用し、何かを指し示す時、指し示されたものは図(figure)となり、ただちにその他が地(ground)として背景に回る。つまり、図と地の境界を引くことなしに何かを指し示すことはできないという。例えば、花瓶を認識する際、無意識にその周囲の空間と花瓶との間に境界線を引いて、花瓶に注目しているからこそ、周囲の空間は背景にまわる。講演会場では、花瓶の背景の空間に注目すると向き合う2人の横顔が浮き上がってくる多義図形が投影され、参加者は花瓶が背景として見えなくなったり、逆にまた花瓶に注目すると横顔が背景になることを体感した。このような花瓶や横顔といった注目している一つのまとまりとそれらの背景部分とをそれぞれ図(figure)と地(ground)と呼ぶ。図地の分化(区別)によってはじめてモノを指し示すことができる。

ベネット先生は図地の分化からさらに言語の世界に展開してゆく。例として「木」を取り上げて、木を定義すると同時に「木以外のものすべて」(例えば鳥にせよ人にせよ)が区別されることを示す。しかし、その中から一つの側面を名付けて木の対義語とするとしたら、何になるだろうか?と問いかける。そしてこの仕組みがジレンマを生むという。木の対義語が地面ならジレンマとはならないかもしれないが、例えば単一/統一(unity)と多様性(diversity)という分化であれば、ジレンマや衝突を生むことは想像に難くない。つまり、現在世に存在するこの二項対立はそもそも人が作り

出したものなのである。

個人的な解釈を交えると、このように分け、分けたことに基づいた経験をし、それを日々個人的にそして集団的に行うことで、さらにその定義が強められたり、弱められて変化して行ったりするといえる。それが繰り返されるうちに人は初めに定義を作りだしたこと自体を忘れ、その定義が外在する所与のものであるかのように認識するようになる。いわゆるバーガーとルックマン(Berger and Luckmann)のいうところの物象化(reification)である。作るプロセスは意識されず、抜け落ちてゆく。これが相対主義のハイジャックをもたらす。逆に物象化されたものを意識的に再構成することで脱物象化する(de-reify)と、二項対立の静的な見方をその二つのモノの間での対話(dialectic)によって動的に和らげる(reconcile)方法を見出すことが期待できる。

ベネット先生は、これまで異文化間コミュニケーションのトレーニングなどで重宝される文化を氷山にみたてるという比喻も適切ではないと指摘された。会場からは氷山の比喻は生徒にもわかりやすく、多用しているのになぜ?といった反応が見られた。それに対してベネット先生はなじみの実証主義的な比喻だからこそわかりやすいのだと目からうろこの指摘をされた。氷山の比喻は静的で物象化した文化のイメージであり、目指している次の段階がよって立つ構成主義的なパラダイムとは違うのもう使えないということを意味していると推察する。

今後は、文化は浮かんでいる静的なモノとしての氷ではなく、構成主義的で動的な渓谷に流れる川で喩えられるという。渓谷は初めからその形をして存在しているのではなく、時をかけて川底を削ることでつくられる。川の勢いや岸でまげられたりするうちに流れる方向が定まる。川自身が日々周りとの相互作用で渓谷を築いている。個人的には、多様な文化が存在しているということは、様々な川があるのと同じで、川が日々流れることで渓谷を築くように、集団の日々の行い、時には個人の行いを通して多様な文化が作られ、変えられたりしてきた、ととらえた。

文化は何かそこにあるモノを身につけているのではなく(it's not something we have)、自身が行使し作り上げていっている現在進行形の行為そのものだ(it's something we are doing)と自覚的に意識できることで、他者の文化もその他者によってつくられていることを共感の下に意識することができる。そのことで、自文化と他文化ひいては自己と他者の存在を、所与のものとして無責任に突き放すことはせず、自分のそして相手の境界の引き方を理解することで、ともに自他の境界を調整しあい、構成主義的に再構成する方向で新たな実行可能な他の経験へと至るというものだ。

では日々どのような実践をすればよいのだろうか。実際に持続可能な異文化感受性をどのようにもたらずかという問題に関してベネット先生は、これまでは自文化中心の人をDMISでいうところの「防御(defense)」から「最小化(minimization)」へ、そして「最小化」から「受容(acceptance)」や「適応(adaptation)」に変えようとしていたが、それには多大な労力を費やすもので時間の無駄になっていたとし、今後は、私たちのメタ意識の質を高めつつ、既に自文化中心主義から文化相対主義のなかでもこれまでとは違う方向に向こうとし始めている人達に働きかけることが、大きな変革をもたらす力になると指摘された。例えば、学内で既に外国人を相手とすることに積極的な教員にまずワークショップをすると良いと。ベネット先生は実際にその方法でほんの数名の教員から、学期中にそれまで好意的でなかった非常に多くの人を巻き込むことができたそうだ。

日本で開催された意義

今回の基調講演を拝聴し、限られた時間の中でベネット先生が一つ一つの概念をその背景となる理論にさかのぼってかなりの時間を割いて丁寧に話された姿が印象的であった。そこに、日本社会において開催された1つの大きな意義があると感じた。なぜなら、現代社会は絶対主義的な世界観や乗っ取られた相対主義的な世界観が流布し、特に日本では知識(何が知識かということがまず問題だが、ここではそれさえ問うことのない普遍的な知識とでもいっておこう)を積み重ねることで世界観が豊かになるイメージが強い。つまり、何をすることもまずこの普遍的知識をスキルを使って詰め込む必要があるといった見方は根強く、様々な衝突を内蔵する複雑な問題に対して妥当な知識が見いだせないまま打開策を立てられない現状があるからだ。根底の考え方を変えないままで、構成主義的なアプローチを知っても、そちらに舵を切ることは難しい。

特に会場からの質問や前日のセミナー及び交流会から気づいたが、参加者にはアカデミアや企業など広義の意味で教育現場を持つ方が多く、異文化コミュニケーション×学びという関心事の方が多かったと拝察する。今回の新たなカギとして提示された考え方—他の可能性を経験する—とは、まさに経験を広げる、新たな世界を「学ぶ」ことであり、その点で今後各自の現場でメタ認識を伴うDMISがどのように応用されるか興味深い。個人的なことになるが、前世紀末、構成主義的な学習観がアカデミアで議論となり始めたころ、私は国際基督教大学で教育工学コミュニケーションの分野を専攻し、卒論で教授・学習理論

における構成主義の文献研究を行った。大学院の実証研究は心理学をベースに、特に認知科学の分野で行っていたが、観察すればするほど「構成主義的」なプロセスが観え、人の学びは社会的で文脈依存であるという考え方につながり、まさに「日常世界の構築」に興味を持って、ついには文化人類学(なかでも科学人類学)に転向し、実践現場も教室からより多様な人々と専門性が行き交うミュージアムに移すこととなった。あれから四半世紀、今また学校現場にフィールドを戻したところ、まさに、教育界は構成主義的な学習論に基づいた教育へ移行しつつある。一方で、教師はそのような教育を生徒としても教師としても受けておらず、変化に対して非常に大きなジレンマを抱えている。今回の基調講演はその行く手に一筋の光を落としてくれた。

基調講演の最後に、司会の山本先生が自身の実践の経験振り返り、時代的に実証主義的なトレーニングから始まり、氷山の比喻を使った実践を経て、最近ようやく構成主義的にやれるようになったとのことでした。そして現在構成主義的アプローチによる大学1,2年生向けの異文化コミュニケーショントレーニングの本をベネット先生、山本先生、石黒武人先生、岡部大祐先生で出す予定だそうだ(2020年に三修社から出版予定)。出版が待ち遠しい。

最後に、今回は学会初参加である私を温かく受け入れていただいた皆様に感謝を申し上げます。初参加でしたので、山本先生から基調講演の報告書の依頼があった時には少々驚きましたが、初参加の視点から皆様のお役に立てるのならと、お礼の意も込めて執筆をお引き受け申し上げました。前日のセミナー後の「ハッピーアワー」、「居酒屋交流会 with Bennett」でも、初対面ですぐに互いが直面している事象について本音で交流でき、本学会に参加する皆様の異文化間コミュニケーション能力の高さと包容力に背中を押されました。Bennett先生、山本先生をはじめ皆様にあらためて感謝申し上げます。また、基調講演で同時通訳者としてお名前の挙がった故齋藤美津子先生にもこの場を借りて深謝の意を表したいと思います。齋藤先生には四半世紀前、国際基督教大学の一般教養の授業で(今回改めて振り返ると)文脈依存で動的なコミュニケーション論の世界にいらさせていただきました。交流会で他の方からも齋藤先生のお名前が挙がり、自分の世界観のルーツの一つを発見することができました。今後も本学会がホルの意図した異文化間コミュニケーションのスピリッツの下に相対主義のジレンマを超える支えの中心となることを期待します。

報告者:三河内 彰子(東京大学)

Milton Bennett on Metaconsciousness and Intercultural Communication

I first met Milton Bennett at a seminar he gave in Tokyo in October 1992 entitled "Consciousness and Intercultural Communication." Over the years I've had an opportunity to attend quite a few of Milton's lectures and workshops, and also to learn more from him about consciousness, constructivism, and intercultural communication through private conversations. I regard Milton as both a teacher and mentor, who has stimulated what has turned out to be an ongoing (never-ending?) research interest in how constructivist ideas might be applied in the field of intercultural communication.

This article is a response to the keynote speech Milton gave at the 19th annual conference of the Japan Society for Multicultural Relations in Tokyo on November 17, 2019 entitled "Reconciling the Dilemmas of Intercultural Consciousness: Constructing Self-Reflexive Agency (Metaconsciousness)." The article also attempts to show how Milton's ideas about consciousness correlate with his constructivist approach to intercultural communication and his work on paradigms (Newtonian, Einsteinian, and quantum), topics treated in the workshop Milton conducted on the previous day of the conference (November 16).



エバノフ先生

In developing his own ideas about the relation between consciousness and intercultural communication, Milton takes as his starting point the theory expounded by Julian Jaynes in his classic book, *The Origin of Consciousness in the Breakdown of the Bicameral Mind* (1990 [1976]). (I was first exposed to Jaynes' ideas as a college student and played in a rock band at the time, which one of the members, who was also reading Jaynes, named "The Bicameral Mind"!.) Jaynes' thesis is that a higher level of consciousness, which he calls *self-reflexive consciousness*, is a culturally evolved phenomena which arose only about 3,000 years ago with the fall of numerous civilizations in the Mediterranean and Near Eastern regions (a period known as the Late Bronze Age Collapse). Prior to that time, it is assumed that humans were *conscious* in the sense that they were awake (i.e., not asleep, or *unconscious*) and capable of having *sensations* (the ability to experience raw sense data), *perceptions* (the ability to distinguish one object from another), and *cognition* (the ability to construct categories, linguistic and otherwise, to understand their experience).

What *homo sapiens* have lacked for most of their 200,000-year history, however, is self-reflexive consciousness, which Jaynes defines as the ability to be aware of the role that we ourselves play in all of these processes. Rather than simply *have* sensations, perceptions, and cognitions, we acquire the ability to introspect and *reflect* on them. In self-reflexive consciousness we regard ourselves both as *subjects*, which have the power to act on the things we encounter in experience, and as *objects* in that we see ourselves as being only one among many other forces that exist in the world.

Before the Bronze Age Collapse, Jaynes contends that human consciousness was *pre-reflective*. Humans could think and act, but, lacking a sense of self, had no understanding of the role that themselves played in these processes. Human psychology was governed by what Jaynes refers to as a *bicameral mind*, in which the right hemisphere of the brain communicates with the left hemisphere through auditory hallucinations. (Jaynes regards contemporary cases of schizophrenia as a vestige of the bicameral mind.) Volition is based not on self-reflective consciousness, but simply on following the "commands" given by these auditory hallucinations. In support of this claim, Jaynes compiled a considerable amount of evidence drawn from ancient literary sources, including Greek mythology and the Jewish Bible, which shows people acting in accordance with the "voices of the gods" and which Jaynes hypothesizes are in fact communications arising in the bicameral mind.

With the collapse of civilizations at the end of the Bronze Age, however, people began to migrate to new areas, thus encountering people who spoke different languages and had different ways of thinking from their own. The need to communicate interculturally with others about commonly shared experiences led to the emergence of a new form of consciousness, self-reflexive consciousness, which Jaynes regards as a psychological adaptation to an increasingly complex world, brought about by population growth, migration, and, consequently, increased contact among people who previously lived in smaller, more isolated groups. In short, wider encounters with others led people to question and critically examine their own way of thinking and to develop a new form of consciousness, in which individuals are able to self-reflect on their own ideas and actions, and to change them by rationally considering alternatives, rather than blindly (unreflectively) following the "voices," which they previously took to be commands from the gods.

Prior to the development of self-reflexive consciousness, humans lacked a clear sense of "self" as something that exists independently from other people and objects. The psychological perspective at this point is that anything that exists, exists as part of, rather than separately from, our own experience and, hence, as things that can be more or less treated as we wish, without showing any ethical concern for them. If we encounter a relatively small number of people outside our own group who are "different" and seem threatening to us, for example, we may deal with the situation by simply killing them (in Jaynes' theory because the voices tell us to).

This strategy becomes maladaptive, however, once we find ourselves surrounded by an ever-growing number of people (as occurred following the Bronze Age Collapse), since we recognize that the chances of us being killed by these numerous others are much greater than the chances of us killing them first. Self-reflexive consciousness thus evolves a more or less "live and let live" attitude, which insures our own self-preservation by psychologically acknowledging the independent existence of both ourselves and others. In other words, another person no longer exists simply as part of my own experience, but also externally as a genuine "other" distinct from myself.

With the appearance of self-reflexive consciousness, Jaynes contends that the bicameral mind began to "break down." People ceased having auditory hallucinations or at least stopped believing that these hallucinations came from the gods. The new social situation required people to cooperate with, rather than kill, each other. In the process of figuring out how to communicate with others despite not sharing a common language, self-reflexive consciousness emerges, which enables people to introspect and rationally reflect on their experiences, and thus better coordinate their activities with each other. Although Jaynes' theory of the bicameral mind remains controversial, it has gained qualified support from a variety of scholars, including the philosopher, Daniel Dennett (1986), and the evolutionary biologist, Richard Dawkins (2007), as one plausible, if not fully proven, hypothesis about how higher levels of consciousness might have evolved among humans.

Fortunately Milton's own treatment of consciousness can be established independently of Jaynes' theory, since, as mentioned previously, Milton uses Jaynes only as a starting point and not as the foundation for his own views. The key, and relatively uncontentious claims, are, first, that humans have indeed evolved higher forms of consciousness, which enable us to critically reflect on our experience as detached observers, as attested to by recent research on metacognition, i.e., knowing about knowing, thinking about thinking, being aware of one's awareness (for a comprehensive overview see Dunlosky and Metcalfe 2009). The second claim, which should be familiar to most researchers in the field of intercultural communication, is that interactions with others, particularly people from other cultures, stimulates self-conscious reflection since such encounters oblige us to admit that our own views about life and the world can be challenged by the differing views of others.

Self-reflexive consciousness appears once we are able to differentiate between ourselves as an "I" and other persons and objects as "not-I." The "I" is not a substantial "thing" (*mind, psyche, or soul*) that is ontologically distinct from our bodies as Descartes and other philosophers have supposed, but rather a psychological construct we invent to capture the sense that we as individuals exist independently from the things that surround us. In self-reflexive consciousness the "I" becomes aware of the role that it plays in constructing its views about life. We do not simply follow what the gods (or voices) tell us to do, but begin to think for ourselves and to arrive at our own ideas about how to relate both to the world and to others in society.

In the process of constructing a distinction between self and others, we encounter a paradox, however, which is that the self can be simultaneously seen as a subject which experiences and an object which is experienced (the "I" is also a "me"). It is precisely the ability to experience ourselves as objects which allows us to develop self-reflexive consciousness, because now we are able to take a step back from ourselves and to look at ourselves from a point of view which is in a sense external to ourselves as experiencing subjects.

Moreover, in the process of recognizing that we ourselves are both subjects and objects, we come to recognize that other people are also both subjects and objects. In other words, we become aware that others are not simply objects that we, as subjects, experience, but that they themselves are also subjects who experience us as objects. As a result we are able to develop what psychologists refer to as a *theory of mind*, i.e., the ability to recognize that other people have minds that are similar to but independent from our own.

In dealing with what we take to be the "objects" of our experience (both physical objects and other persons), we make what Milton refers to as *figure-ground* distinctions. We distinguish, for example, between the "tree" and the "forest" that surrounds it or, more generally between that which we direct our attention towards as *figure* and the relatively unnoticed things which surround it as *ground*. Without the ability to make figure-ground distinctions, the world would appear to us as an undifferentiated slush—what the philosopher, William James, called a "blooming, buzzing confusion" (1950 [1890], p. 488).

Distinctions between figure and ground are what make language possible, because we are able to sort the world into "things" which we can then label and categorize. A word such as *snowflake* is a term we create to talk about objects that we psychologically categorize as being in some sense "similar," even though they may in fact be quite different from each other (no two snowflakes are exactly alike). For Jaynes, the ability to use *metaphors* greatly extends the human capacity for categorization because they allow us to make the move from *concrete* to *abstract* thinking. We may, for example, use the word *head* concretely to refer to the "thing" at the top of our bodies, but we may also use it metaphorically, i.e., abstractly, to refer to such "things" as the "head of an army, table, page, bed, ship, household, or nail..." (Jaynes 1990, p. 49). Jaynes contends that the shift from concrete to metaphorical/abstract thinking is, in part, what enabled humans to evolve higher levels of consciousness (for a more philosophical treatment of metaphors, see Lakoff and Johnson 1980).

From a constructivist perspective all categories—*constructs* in George Kelly's (1955) terminology, *schema* in Piaget's (1985)—linguistic and otherwise, are psychological creations, even though the reality they purport to describe may indeed have an independent existence apart from our awareness of it. (In numerous conversations I've had with Milton on this point, he always insists that constructivism is not a form of *solipsism*—the idealistic view that reality exists only "inside the head.") Nonetheless, we may adopt a *reified* view of the constructs we use for describing the world if we unwittingly regard them as being "given" to us in some way by external reality rather than as creations of our own minds. Milton often references Berger and Luckmann's classic book, *The Social Construction of Reality* (1966), to drive home this point. In other words, while whatever is physically "real" is mind-independent, constructs are not.

Unlike physical reality, social reality has no external reality apart from human consciousness. Social phenomena, such as laws, national borders, and the value of money, have no objective existence in the absence of human consciousness. Cultural norms as well exist nowhere in the physical world but are rather brought into being (constructed) through human psychological processes. *Culture*, then, is simply a set of norms intersubjectively shared in varying degrees by the members of a given social group. Moreover, once these norms disappear from consciousness, they cease to exist. In Anthony Giddens' (1984) structuration theory, social realities continue to exist only to the extent that they are *reproduced* intersubjectively by the individual members of a given society.

Milton similarly resolves what is known as the structure-agency debate by seeing social *structures* as being maintained through the *agency* of individuals. In a conversation I had with him just prior to his keynote speech, Milton suggested that a social institution, such as democracy, ceases to exist once people lose faith in it and stop voting. Nonetheless, it is not uncommon for people to adopt a reified view of social reality by thinking that cultural norms are given to us by nature rather than being socially constructed (e.g., humans are *by nature* competitive, so capitalism is the best economic system vs. humans are *by nature* cooperative, so communism is the best economic system).

Constructivists contend to the contrary that if social realities are constructed through communicative practices, then they can also be dismantled and *reconstructed*. This process of reconstruction is possible precisely because humans are capable of engaging in self-reflective thought. Even though each of us is socialized into accepting the cultural norms of the societies we are brought up in, we are never beholden to those norms. Rather, we can think critically and imaginatively about whether we wish to maintain existing cultural norms or to radically change them. Since cultural norms are just ideas in the head, they can be freely criticized both *within* and *between* cultures. While we should always avoid criticizing the *people* of a culture which is different from our own, it is still possible to critically (and constructively) evaluate their *norms* in the same way that it is possible to critically evaluate the norms of our own culture.

What enables us to engage in critical reflection is *metaconsciousness*, which is simply the ability to be conscious of our own consciousness. Not only do we become aware of the role that we play in constructing our ideas about the physical world and social reality (self-reflexive consciousness), but we become aware that we ourselves have the ability to control this process (metaconsciousness). In other words, it is metaconsciousness that allows us to recognize our own powers of agency. If we don't like the ideas and norms we have constructed on the basis of self-reflexive consciousness, we are able to question, challenge, refine, and indeed change them through the use of metaconsciousness.

At the level of self-reflexive consciousness, we recognize that others have an independent existence from ourselves and are, therefore, *autonomous* in the same way that we ourselves are. That is, we see that other individuals are capable of making their own judgments about how their ideas are or should be constructed, and these may differ from the judgments we make about our own constructions. Thus, there may be significant differences between how the members of one cultural group construct their views of the physical world and social reality and how the members of other cultural groups construct their own views.

As a result, we may be inclined to adopt the cultural relativist position that, in the interest of avoiding conflict with people from other cultures whose views are different from our own, we should simply accept and respect all cultures just as they are. This stance is widely accepted among practitioners in the field of intercultural communication and has served us well in the past, but nonetheless, as Milton contends, has severe limitations. The main problem is that cultural relativism easily leads to the view that one person's opinion is as good as another's, a view which has been coopted in recent times by those who wish maintain their own position on any given issue without giving persuasive arguments in its defense. Some people think global warming exists; others don't. Since no objective arguments can be made in favor of one opinion over the other, "truth" is simply a matter of whatever we think it is.

While cultural relativism is often regarded as a "progressive" point of view, since it adopts the "live and let live" mentality of self-reflexive consciousness, it is in fact highly regressive and tradition-bound. Precisely because cultural relativism goes no further than to contend that different cultures construct their ideas differently, it fails to consider how people from different cultures might constructively critique their existing cultural norms and imaginatively create entire new norms that might enable them to cooperate more effectively with each other.

Milton criticizes both the tendency of *modernism*, based on a Newtonian worldview, to think that there are certain absolutes which should be universally adopted by all cultures since they are part of objective reality or "nature" and hence not subject to cultural variation, and the tendency of *postmodernism*, based on an Einsteinian worldview, to see any and all ideas as being subjective/intersubjective and thus relative to the cultural context in which they appear. Milton's favored approach is *constructivism*, which concurs with the quantum view that observers are themselves part of the reality they are observing (Bennett 2005; 2013; for an independent treatment of these perspectives, see Evanoff 2004; 2006). That is, we do not simply passively observe the world and other people but actively engage ourselves with them. Constructions are not simply a matter of subjective opinion, but are created through the interactions we have both with the world and with others in society.

Jaynes' concept of self-reflexive consciousness only takes us, as it were, to the postmodern level. We recognize that each of us actively constructs our view of the world and social reality, both individually and collectively as members of a given culture. We further recognize that others are capable, both individually and collectively of constructing their own distinct ideas about physical and social reality. It may be concluded from the standpoint of self-reflexive consciousness that since there are no absolutes (in the Newtonian sense), we should therefore simply accept and respect different cultures as they are, since any ideas that a given individual may have are only understandable in the context of the particular culture that person is a member of (as the Einsteinian worldview suggests) and it is impossible to critique the point of view of any other culture except from the perspective of one's own culture.

The next step, in Milton's view, is for us to move from a relativist position based on self-reflexive consciousness to a constructivist perspective based on metaconsciousness. In the same way that self-reflexive consciousness was a suitable evolutionary adaptation to changing circumstances in the past, when cultural differences needed to be recognized, metaconsciousness is an appropriate evolutionary adaptation to the present, when differences need to be not simply recognized but also negotiated.

In self-reflexive consciousness the "I" recognizes itself as distinct from the "not-I" (oneself and others). Moreover, as the "I" becomes cognizant of the role that it plays in constructing its views of the world, it also becomes aware that others, particularly people from different cultures, construct their own views, which may be different from one's own, a perspective which leads effortlessly to the notion that all ideas, values, and norms are relative to the particular social contexts in which they appear.

In metaconsciousness, however, the "I" is aware not only that it and other "I's" are responsible for constructing their own views of the world (self-reflexive consciousness), but also that each "I" has the ability to direct and control its own constructions (metaconsciousness). Whereas self-reflexive consciousness always remains *inside* the process of construct formation, metaconsciousness allows us to step outside the process and to critically examine it from a detached point of view. Consider the difference between baking a cake and being aware that we are following a recipe that someone (either ourselves or others) has at some point in time constructed (self-reflexive consciousness) and being aware that if we don't like the recipe we can change it (metaconsciousness).

To the extent that I am able to critically examine my own constructive activities from a meta-perspective, I realize not only that I am engaging in constructive activity as such, but also that I am "in charge" of directing my own thoughts and behavior. It is metaconsciousness, then, which leads us to a recognition of what Milton refers to as our own *agency*. Moreover, it is this acquired sense of agency that allows us to take ethical responsibility for how we think and act.

References

- Bennett, Milton J. (2005). "Paradigmatic Assumptions of Intercultural Communication." Hillsboro: IDRInstitute. Available on the Intercultural Development Research Institute website at <<https://www.idrinstitute.org/wp-content/uploads/2018/02/Paradigmatic-Assumptions.pdf>>.
- _____. (2013). *Basic Concepts of Intercultural Communication: Paradigms, Principles, and Practices*. 2nd ed. Boston: Intercultural Press.
- Berger, Peter and Thomas Luckmann (1966). *The Social Construction of Reality*. Garden City: Doubleday.
- Dawkins, Richard (2007). *The God Delusion*. London: Black Swan.
- Dennett, Daniel C. (1986). "Julian Jaynes' Software Archaeology." *Canadian Psychology* 27(2):149–154.
- Dunlosky, John and Janet Metcalfe (2009). *Metacognition*. Los Angeles: Sage.
- Evanoff, Richard (2004). "Universalist, Relativist, and Constructivist Approaches to Intercultural Ethics." *International Journal of Intercultural Relations* 28(5):439–458.
- _____. (2006). "Intercultural Ethics: A Constructivist Approach." *Journal of Intercultural Communication* 9:89–102. Available on the Intercultural Development Research Institute website at <https://www.idrinstitute.org/wp-content/uploads/2018/02/Evanoff-Intercultural_Ethics.pdf>.
- Giddens, Anthony (1984). *The Constitution of Society*. Cambridge: Polity.
- James, William (1950 [1890]). *The Principles of Psychology*. Vol. 1. New York: Dover.
- Jaynes, Julian (1990 [1976]). *The Origin of Consciousness in the Breakdown of the Bicameral Mind*. Boston: Houghton Mifflin.
- Kelly, George A. (1955). *The Psychology of Personal Constructs*. New York: Norton.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Piaget, Jean (1985). *The Equilibration of Cognitive Structures: The Central Problem of Intellectual Development*. Trans. Terrance Brown and Kishore Julian Thampy. Chicago: University of Chicago Press.

報告者 Richard Evanoff (青山学院大学国際政治経済学部)

※ 本報告書はニュースレター用のshort versionです。
full versionは大会HPで公開していますので、そちらをご覧ください。

特別講演

「DMIS セミナー (DMIS:異文化感受性発達モデル)」

【講演者】ミルトン・ベネット 氏 Dr. Milton Bennett (IDR Institute)

New Theoretical Implications of the DMIS: Co-Ontogenic Perception and Quantum Measurement 「DMISの新たな理論的含意:共同発生的な知覚と量子論的観測」に参加して

私はかつてポートランド州立大学コミュニケーション学科の大学院生として、本セミナーの講演者であるミルトン・ベネット博士の授業を受講した。毎回、心躍らせながら、時には難解な哲学的内容に頭を掻きむしりながらも、舞台上の演劇のように展開される先生の授業に臨んでいたことを四半世紀以上経た今でも、鮮明に記憶している。そんなノスタルジックな思いとは裏腹に、今回もお馴染みのベネット節は聴衆を魅了し続けた。本セミナーの内容は、2016年度の関東地区研究会で話された講演内容をさらに進化させたものであった(残念ながら、私はこのセミナーには出席できなかったが)。以下では、本セミナーの内容を概観しながら、特に印象に残った内容について報告したい。

セミナーは10年前に95歳で他界された、ICC(異文化間コミュニケーション)の名付け親であり、米国の文化人類学者であったエドワード・ホール氏の功績に対する紹介で始まった。ホールが新しい視点を紹介するまでは、世の中に普遍的基準(universal standard)があるという前提で文化比較がなされてきたことから、文化を優劣で判断してしまうという西洋的優位性に陥っていた。しかし、彼は普遍的基準がなくとも文化比較は可能であるとしながら、あらゆる人間の活動にはコンテクスト(状況)が存在すると指摘し、文化相対主義的の視点(cultural relativism)の重要性を説いた。

ICCの発展の初期においては、上記の視点が文化を理解する際に適用され、構築された観察上の枠組み(constructed observational categories)を用いながら文化差を理解し、そのうえで、異文化間の誤解を予測してきた。しかし、現在、ICCの分野では、自分自身の経験や状況を超えて、他者の経験にいかにか寄り添っていくか(つまり、他者と互いの経験をいかにか共有するか)という課題がより重要視されており、DMIS(異文化感受性発達モデル:Developmental Model of Intercultural Sensitivity)を用いて、この重要課題を検討することが、セミナーの趣旨であった。ここでは、「いかにかして、我々は経験を発展させることができる

のか」、そして、「いかにかして、我々は経験を測定できるのか」という2つの問いかけが提示された。前者の問いに対する解答の糸口となるのが、タイトルにある「共同発生的知覚*1(co-ontogenetic perception)」という神経生物学的観点*2であり、後者の問いに関しては、「量子論的観測(Quantum measurement)」が関連している。



Bennett先生

パラダイムの概念は、科学史家・科学哲学者のトーマス・クーンによって提唱された科学史及び科学哲学上の概念だが、これまでさまざまな歴史的変遷をみてきた。それらは、理性による普遍性と直線的因果関係(linear causality)を重視するニュートンの普遍主義(Newtonian paradigm)、観察者に基準枠があり、経験とは複数の視点を獲得しつつ、別のコンテクストに視点をシフトすることで世の中の違いに気づけるとする相対主義(Einsteinian paradigm)、そして構成主義に深く関与する量子理論の視点に立ったパラダイム(Quantum paradigm)である。ベネット博士は、相対主義の考え方は重要ではあるものの、この視点はもはや終焉を迎えていると指摘する。そこには相手に共感することから生まれる経験は存在しない。博士が言わんとする構成主義とは、ある事物や現象をその内容(特定の唯一の、または、限定された複数の構成要素)や必然性(特定の原因に強い因果性を求める)というような確固たるものに帰属させるのではなく、ある事物や現象を、複数の構成要素や確立性(複数の原因による相互作用の帰結)という不確定、かつ、動的なものに帰属させるという考え方である。

ジョージ・ケリーの主張を博士が言い換えた「経験というのは何か出来事が起こった際に、その近くにいるのではなく、いかにその出来事を理解するかということである (Experience is not a function of being in the vicinity of events when they occur; rather it is a function of how one construes the events.)」との一節は印象深く心に残る。例えば、アメリカ人は単にフランスにいてフランス人の経験を共有できるものではない。フランス人の視点で周囲の出来事を理解する必要がある。量子論的観点から言えば、我々は観察を通じて、あらゆる可能性 (probability) を特定の状態に収束させている。そして、それは決して自分ひとりによる作業ではなく、周囲の人たちとの共同作業であり (We are engaging in co-ontogenesis, and co-constructing)、その意味でわたしたちは、彼らとの相互作用 (interaction) により、常に現実 (reality) を更新 (構築) し続けている。

セミナーの後半では、最初に提示された2つの問いに答えるべく、構成主義の立場からDMISの概念について詳細な検討が展開された。まず、知識、態度、スキルは、異文化間能力 (intercultural competence) の発達に必須の3要素と長年理解されてきたが、博士はこれに異を唱えている。なぜなら、これらは実証主義的パラダイムに基づくものであり、他者との経験の共有や異文化体験は、むしろ、知覚的経験 (perceptual experience) と深い関わりがあるからである。DMISは長年適応モデルとして理解されてきたが、博士によれば、実のところ、これは経験モデルであり、心の心理学的理論とも呼べるものであるという。つまり、自民族・自文化中心主義的な限られた経験を乗り越え、別の実行可能な経験 (alternative experience) により、意識的に世界観を構築することを目指した知覚の発展に焦点をあてたものである。

否定 (denial)、防御 (defense)、最小化 (minimization) [以上、自民族・自文化中心主義]、受容 (acceptance)、適応 (adaptation)、統合 (integration) [以上、文化相対主義] の各ステージの移行の際の橋渡しの役割として、reconciliation (和解) という概念が紹介された。これは、いわば、いわゆる二分法 (dichotomy) 的見方を弁証法 (対話) (dialectic) により緩和させる方法である (各ステージの移行に必要な考え方については紙幅の関係上、割愛させていただく)。

最後に、長年、異文化コミュニケーション教育に携わってきた身として、知識、態度、スキルは異文化間能力の醸成には寄与しないとの博士の指摘は、ややショッキングなものであったものの、ここで重要となるのは異文化に実際に身を置き、そこで何が起きているかを観察し、相手文化の習慣的行動を単にトライアウトするのではなく、相手に共感することで、真の

意味で経験を共有する努力を怠らないことだと思う。無論、これは非常に難しいことではある。相対主義的視点では、相手との間に境界を作ってしまう、相手と経験を共有できない。そのためにreconciliationを实践することで、相手の経験に少しでも近づくことが可能になる。そして、実行可能な多数の選択肢の中で、自分が選択したものに責任をもってコミットすることが重要となる。また、自分の授業で文化相対主義の重要性を学生たちに話す際、”Anything goes”と誤って理解されることを防ぐべく、そこには必ず倫理というのが存在すべきことを説いてきたが、博士が指摘されたcontextual relativism (状況的相対主義) の考え方は非常に腑に落ちるものであった。互いの倫理的立場を認めるのみならず、対話によるインターアクションを通じて、共に現実を構築していくという視点は、現在、政治、ビジネス、教育といった様々な分野において現在進行形で起こるめまぐるしい変化に適切に対応していくために、今後益々、重視視されよう。30年を経た今も、変わらぬ先生のエネルギー溢る講演に感銘を受けたとともに、90分間に渡って上演されたベネット劇場に一聴衆として参加できたことに心より感謝したい。DMISの量子論的観測法を完成されたあかつきには、再び、この日本でベネット劇場が上演されることを心待ちにしている。



中川先生・Bennett先生

注:*1 co-ontogenicの直訳は「個体発生的」であるが、構成主義的観点からは「共同発生的」がより適切であると思われる。

*2 セミナーの鍵概念であるco-ontogenicについて、筆者なりに調べたところ、これは生物学の用語であり、個体発生＝生物が受精(受粉)によって発生を開始して成体になり、老化して死ぬまでの過程を指す。社会的観点に主流を置く構成主義理論家とは立場を異にする神経生物学的観点に立つ構成主義者により使われるとされ、ここでは知覚器官(perceptual apparatus)と関連していると考えられる。

報告者: 中川 典子 (流通科学大学)

プレカンファレンス

「Eticな態度とEmicなスキルの2側面から異文化コミュニケーション力を測定する」

【講師】田崎 勝也 氏(青山学院大学)

プレカンファレンスWSに参加して

田崎勝也氏による「Etic的な態度とEmic的なスキルの2側面から異文化コミュニケーション力を測定する」は、とても刺激的な内容でした。多文化を扱う研究者にとっての課題は、さまざまな社会現象を明らかにするだけでなく、今後起こりうる諸問題に示唆を与えることにあります。この観点からみると、今回の内容は、その解決の糸口になると思われます。たとえば、行動を司ることが特性か状況かと判断することは、長年心理学で論争されていた遺伝か環境かということにもつながっています。これを優劣で判断するのではなく、相互作用という見解によって説明力を持つことが強調されていました。

心理測定については、SpearmanやThurstoneを含めた様々な因子モデルを分かりやすく紹介しているため、心理学以外の研究者にとっても参考になるよう配慮されていました。状況と特性を同時に測定する試みとして、ビジネスコミュニケーション能力を測定するC-Examの事例が取り上げられていました。さらに、申知元氏と共に取り組んでいる異文化への態度

と知識的側面の2側面から異文化コミュニケーション力を測定する試みが紹介されていました。知識的側面は、日韓の内容ではあるものの、日本語・韓国語に限らず今後の外国語教育に影響を与えることと思われれます。さらに、単なる量的方法だけでなく、インタビュー調査を併用していることも大変興味深く感じました。多文化の様々な領域では、適材適所の方法論を用いることが不可欠です。しかしながら、研究者にとっては扱える方法が限定されていることが多く、ある問題を解明するには、それに合った方法を用いることの重要性を改めて痛感しました。

また、単なる講義スタイルだけでなく、3人一組のディスカッションを取り入れていたことも良かったと思われれます。個人的には苦手ではあるものの、今後の日本にとって、グローバルスタンダードにおけるシナジー効果やコミュニケーション能力を提示していくべき当学会のあり方であった形式で、参加者も大いに議論を交わしていました。

報告者:河野 康成

20周年記念事業シンポジウム(学術委員会企画)

「文化研究と社会的責任」

【ファシリテーター】岡部 大祐 (順天堂大学)

【ファシリテーター】河野 秀樹 (目白大学)

【ファシリテーター】湊 邦生 (高知大学)

【ファシリテーター】藤 美帆 (広島修道大学)

今年の学術企画は格段と進歩した。去年のそれとの比較である。

去年は「スペキュラティブ」、「楽しむ」をキーワードに、円卓用紙を使い、参加者が通常とは近い位置取りで話をするのは刺激的ではあったのだが、なかなか「楽しむ」ところまでに到達し得ていただろうか。多少のもやもや感が胸に残ったのが正直な感想だった。

そして今回の「責任」。テーマそのものは「楽しむ」からは相当の飛躍だが、何が飛び出すかは、蓋を開けてみなければわからない。さすがに去年の経験も手伝って、大部屋へ入るときには、私の脚はそれなりに重かった。ところが、初めこそ参加者の少なさが危惧されたものの、時間を経るにつれ、一人そしてまたひとりと来場者が増え、気付いてみれば、4つのテーブルの席が程よく埋まり、心地よい雰囲気の中で話し合いが進められた。終わったときには、不思議な爽快感にあたりが包まれていた。

ファシリテーターの岡部先生、藤先生による絶妙なタイミングで施される巧妙な解説が、どこへ転ぶかわ

からない参加者同士の話の舵取りをしてくれる。参加者は安心して、一応は求められたことを理解した上で好き勝手に話に興ずる。去年は、参加者がいつ溺れるか知れない海を必死で泳いでいたのだとすれば、今年は、経験のあるライフセーバーに監視されながら泳ぎを楽しめた感を持てるまでに成長を遂げた。

参加型イベントを毛嫌いする方がいる。その気持ちはわからないでもない。ただ、多くのセッションでは発表や質問をしない限り、自分が発言する機会はほとんどないに等しい。だとすると懇親会で、となるが、懇親会で真面目腐って話をするのも気が引ける。となると、本当に中途半端に真面目に語る機会が年次大会にはあまりないことになってしまう。

そこでおすすめなのが、20周年記念事業シンポジウム。内容は真面目だが、話はやわらかくて一向に構わない。来年のテーマは「創造」だろうか。さて、どのような創造の場が産み出されるか、今から楽しみでならない。

報告者:小坂 貴志(神田外語大学)

パネル・ディスカッション

多文化関係学と私のつながり ～ 研究・教育における具体的な展開 ～

【ディスカッサント】 岡部 大祐 氏(順天堂大学)、馬場 智子 氏(岩手大学)

【レスポナント】 抱井 尚子 氏(青山学院大学)、松永 典子 氏(九州大学)

【コーディネーター】 石黒 武人(武蔵野大学)、山本 志都(東海大学)

パネル・ディスカッションでは、「多文化関係学と私のつながり ～研究・教育における具体的な展開～」と題し、多文化関係学が各会員にどのような意味を持っているのかを問い直し、その意義について研究・教育の両面から議論を行いました。順天堂大学助教授の岡部大祐氏と岩手大学准教授の馬場智子氏にディスカッサントとして、そして本学会会長経験者である青山学院大学教授の抱井尚子氏と九州大学教授の松永典子氏にレスポナントとしてご登壇いただき、武蔵野大学准教授の石黒武人氏と東海大学教授の山本志都氏にコーディネーターとして、ディスカッションをまとめていただきました。

まず、開始前に、4人1組で座るよう指示がありました。そして、開始後に、今回のパネル・ディスカッションでは出席者の参加促進のためにブレインライティング(Brainwriting, 以下BW)を用いて意見交換を行う、と説明がありました。BWとは、西ドイツで開発された読み合い・書き合いによる無言の思考法です。具体的には、4人1組で集まり、各自が「多文化関係と私のつながり」についてシートに思いついたこと・考えたことを3点書きます。そして、グループ内でシートを回し、前の人が書いたことを読みながら考えたことを2分間で3つ書いていき、それを3回繰り返します。書く際は、①判断延期(考え込まずにひたすら発想する)、②自由奔放(思いついたことは何でも書く)、③大量発想(質より量)、④便乗発展(他者の意見からの発展)という4つのルールも伝えられました。BWの説明の後には、本テーマについてディスカッサントとレスポナントによる発表が行われ、その間に、各自で1回目のBWをするよう指示がありました。

まず、馬場智子氏は、もともと比較教育学をご専門としていましたが、本学会への参加がきっかけで、教育学を専門としない会員からの視点や考えが得られたことで、ご自身の研究や教育の幅が広がったことをお話くださいました。

岡部大祐氏は、寛容で温かい本学会が14年間ご自身の研究に刺激を与え続けており、また、本学会を「公園」にたとえ、自由に楽しみながら研究ができる場だとお話しされました。

次に、レスポナント2名の発表がありました。まず、抱井尚子氏は、多文化関係学会では、現実の課題に対して、ミクロ・メゾ・マクロレベルの複合的アプローチにより混合研究法を用いて研究すべきであり、「研

究の質」に関する議論を今後の課題としてご提案されました。

そして、松永典子氏は、研究、教育、社会への発信という点について、教育・研究に関しては実践しているが、その実践をどのように他分野と協同しながら社会へ発信するかが今後の課題だと、お話しくださいました。



松永先生
岡部先生・馬場先生・抱井先生

発表の後には、BWのグループワークを行いました。BWを3回繰り返した後グループ内で10分間共有し、特に印象に残ったものに星印をつけました。私たちのグループでは、「本学会が人的・知的なワクワク感を会員に提供し、築ける場であり続けて欲しい」というコメントに星印をつけましたが、同時に、「研究は、楽しいだけではない。苦しみながら結果を出すことも大切だ」という意見も出ました。比較的新しい会員は、研究の幅が広がりワクワク感を与えてくれる学会と考えていますが、本学会設立当初からの会員は、研究の質を深めるために学会があるという意見の違いが印象的でした。

最後に、星印のコメントは後日共有されると山本志都氏から案内がありました。BWという思考法を実践しながら学べたと同時に、様々な立場の会員による多文化関係学への思いを共有することで、今後の学会の発展につながると思われるパネル・ディスカッションとなりました。

報告者: 中野 遼子(大阪大学国際教育交流センター)

石井米雄奨励賞

2019年度の「石井米雄奨励賞」については、応募者がございませんでした。来年度は、応募該当者からの積極的な応募を期待いたします。

第19回年次大会は近畿大学にて開催 テーマ「内なる国際化：半径5メートルにおける多文化共生」

第19回大会準備委員会委員長 小坂 貴志（神田外語大学）

■ 期日(仮)：2020年10月24日(土)・10月25日(日)

プレカンファレンス：10月23日(金)

本年度中には、確定期日をお伝えいたします。

■ 会場：近畿大学 〒577-8502 大阪府東大阪市小若江3丁目4-1

C館(法学部棟)近鉄大阪線・長瀬駅より徒歩10分

■ 発表申し込み：2020年5月1日～31日

■ 内容(進捗状況のご報告)

大会テーマである「内なる国際化：半径5メートルにおける多文化共生」を旗印に大会を運営してまいります。多文化共生というと、とかく大きな枠組みで論じられる傾向にあります。しかし、私たちの生活空間に目を転じてみると、多くの会員が所属している大学をはじめ、地元のコミュニティと私たちとの関係性の重要性に気付かされます。この現状を踏まえ、今回の大会では、多文化関係学会の会員にとって身近である大学や大学と地元コミュニティとの多文化共生を考察し、今後、多文化関係学が進展をしていく上での居心地の良さの模索をおこなっていく機会としていただきます。

プレカンファレンスは、2020年10月23日(金)に開催予定で、案として、大阪朝鮮高級学校訪問、その後、大阪・生野コリアンタウンで観光・食事、あるいは、別の案として国立民族学博物館訪問も候補にあがっています。基調講演は、「内なる国際化」または外国ルーツの子どもたちや移民の言語教育の専門家を招聘する予定です。パネルディスカッションは、留学生・外国籍教員が大学の多文化化に寄与することの重要性を再認識し、20周年記念事業シンポジウム(学術委員会企画)では、「創造」をテーマに、今年も工夫された仕掛けで参加者を対話の輪に巻き込みます。学術委員会と編集委員会が協力して、APA 7thおよび学会誌投稿のガイドラインに関するワークショップの開催を調整しています。「近大マグロで食い倒れ」を懇親会テーマとして、近畿大学が誇る豪華な教員ラウンジで、近大マグロをご堪能いただきます。

大会準備委員(敬称略、あいうえお順)は、大澤麻里子(東京大学)、岡部大祐(順天堂大学)、奥西有理(岡山理科大学)、海谷千波(杏林大学)、シャザディグリ・シャウティ(青山学院大学)、出口朋美(近畿大学)、中野遼子(大阪大学)、水松巳奈(東北大学)、叶尤奇(明治大学)です。

「行こうかな」ではなく、19回だけに19(いく)大会だとお考えください！

2019年度多文化関係学会 理事会議事録 抄録

■第1回理事会 議事録

日時:2019年6月1日(日)11:30~13:00

場所:青山学院大学青山キャンパス、8号館4階、国際研究センター会議室

出席者(敬称略・順不同):田崎、湊、田中、松井、岡部、岡村、武田、宇治谷、江藤、河野、山本、出口

委任状(敬称略・順不同):内藤、馬場、金本、畠中、小林、小坂(敬称略・順不同)

1. 報告事項

(1) 第18回大会準備委員会からの報告

現在22件の研究発表申し込みがあり、プロポーザルの締め切り延長はない旨報告があった。最初11月16日(土)に予定されていたシンポジウムも翌日の日曜日に変更になり、シンポジウムはじめ、パネルディスカッション、基調講演がすべて大講義室で実施されることとなった。

(2) 事務局からの報告

現在の会員総数は307名(正会員236名、シニア会員4名、学生会員67名)と報告があった。アクセライトへの業務引き継ぎに伴い、ゆうちょ銀行の他の2口座と同様、「多文化関係学会 事務局長 Tanaka Manami」で口座を開設した。次の事務局長に引き継ぐときは、名義変更が必要となる。

(3) 2019年度活動計画について(各委員会委員長)

学術委員会活動報告:オンラインも含め年7回の会議を行う計画である。11月には「特定課題研究」の募集が開始されるが、例年応募者が少なくプロモーションが必要になる。

(4) 地区研究会委員会からの報告

関東地区:臨時総会終了後、森 敏氏を招き「多文化コミュニティに生成する『場』 オーガニックフードをめぐる取り組み事例より」という題目で講演があることが報告された。他の地区では現在のところ研究会は未定。

(5) 学会誌編集委員会からの報告

16号については5月に査読者の決定をし、7月末に査読結果を発表、7月28日に査読結果によって手直しをする予定である。

(6) ニュースレター委員会からの報告

6月1日発行の予定であったが、少し遅れる旨報告があった。

(7) 財務委員会からの報告

財務委員から収支決算報告がある。2018年度は黒字額が244,051円であった。

(8) その他

特になし

2. 審議事項

(1) 2019年度予算について

学会誌販売・論文使用料について昨年度は収入がなかったので、学会誌を積極的に販売していくよう提案され、承認された。

(2) 特定課題研究について

学術委員会から「特定課題研究」の応募者が毎年少ないため、大会を利用した広報、例えば大会プログラムにお知らせをはさむなどが提案され、承認された。

(3) 2020年度大会について

開催校は現在のところ未定。窓口は田中事務局長で、各理事が候補地を検討することが決定された。

(4) 会員専用サイトアクセス権限について
内容を変更できる権限を持っている会員を、会長、副会長、事務局長、ウェブ管理委員長の5名にすることが承認された。

(5) 20周年記念事業本年度予算について
ビデオ会議ツールや海外からのシンポジウム登壇者の謝礼を含む170,000円が計上されることが承認された。

(6) 校閲・校正の外注について
前年度からの申し送り事項であった校正・校閲作業の外注について、まずは編集委員会での対策を話し合い、それを理事会で報告・審議したあとで、再度検討することが決定された。

(7) その他
ニュースレターに委員の名前と所属を載せるために、ニュースレター委員会委員長に情報を送るよう
に要請があった。

■第2回理事会 議事録

日時:2019年7月7日(日)12:30~14:00

場所:近畿大学東大阪キャンパス C館1階111教室

出席者(敬称略・順不同):田崎、田中、岡部、畠中、岡村、内藤、小坂、馬場、山本、出口、湊

委任状(敬称略・順不同):金本、武田、松井、宇治谷、江藤、小林

1. 報告事項

(1)事務局長からの報告

会員数は前回より4名減少(8名除籍の分と、新会員が4名)で計303名。

うち正会員230名、シニア会員4名、学生会員69名。

(2)地区研究会委員会からの報告

- 北海道・東北地区:6月22日に藤女子大にて開催されたことが報告された。
- 中部関西地区:7月7日に近畿大学にて開催予定であることが報告された。
- その他地区:報告なし

(3)第18回年次大会委員会からの報告

- 査読が終了し、今後抄録が作成される予定。
- 8月31日17時締め切り。執筆要項を前年度より変更し作成した。
- 大会のチラシ・ポスターを作製した。配布できる学会があったらお願いしたい(送付したい)。

(4)学会誌編集委員会からの報告

16号の編集中。7月23日に今年度第2回の編集委員会開催予定。現在、査読結果待ち。

(5)学術委員会からの報告

現在、全国大会のシンポジウムの話し合いが行われている。大テーマとの整合性を図りつつ新しい取り組みも提示できればと討論している。

(6)その他

なし

2. 審議事項

(1)第19回年次大会について

- 主催校無しの形なので大会委員を別途設けて開催の形式だが、予算による。
- 福島で開催した際、当日変更がかなりあったという反省から、沖縄の場合は事前に理事が赴き、下調べする必要がある事が指摘された。
- 出席者は例年70~80人位。琉球大学等、沖縄に会員がいないか調べる事が提案された。

(2) 会員からの問い合わせに関して

- 事務局メールに問い合わせ。様々なものが1つに来るので対応を一本化にすることが審議され、承認された。
- m_admin宛に送られてきたメールを発信専用とすることが提案され、承認された。
- 会費に関することは、これまでは事務局から委託業者へ連絡するように会員に伝えていたが、二度手間になるので、一律転送する(業者に)という対応を2か月ほど試行してみたいという提案があり、承認された。
- 退会の手続きについてWEBサイトに書かれていないが、どう連絡すべきか。会費支払い期限も掲載すべきでは。3月31日に自動更新されるとはどこにも書いていない。明記した方がいい。NLに記載があるのでWEBサイトに載せた方がいい。ただし、簡単に退会できるようにするのではなく、アクセライトの問い合わせ先を載せる等の形式にする。委託費変動に関しては2-3か月様子を見て後日検討。
- 予算のめどが立てやすくなるため学会費の期限を明記してはという意見があり、締め切りを6月30日にしては提案が出て承認された。

(3) その他

- 今年郵貯の大会用口座に払った人がいたため、口座間違いや、二重支払いなどの際の返金手数料は会員本人にすることが提案され、承認された。
- 年次大会スケジューリングについて。関連学会との事前調整はできないか(日程調整)という質問が出された。回答として、今年は1週間ずらしたが、遠方の場合は合同開催するという方法も1つではないかという提案がなされた。

【今後の本学会のアイデンティティや、個別研究間の関連、議論の活性化について】

- 前回の理事会で田崎先生から、もっと知見を蓄積すべきと問題提起がなされた。この問題提起に関して、学会誌・年次大会のあり方、会員間の学術連携やシナジーを作るための仕組み、研究成果のwebでの発信等について議論がなされた。その結果、学術委員会の体制を拡充すること、学会設立20周年を機に、何らかの形で設立から現在までを振り返る機会を設けること、研究成果物についてweb上での発信が可能となるよう、技術上の可能性を確認することについて合意した。

■ 第3回理事会 議事録

日時: 2019年11月17日(日) 8:00~9:00

場所: 東京未来大学B棟3階(B324講義室)

出席者(敬称略・順不同): 田崎、出口、田中、松井、岡部、金本、内藤、小阪、馬場、宇治谷、小林、河野、松田、山本、武田

委任状(敬称略・順不同): 湊、畠中、江藤、岡村

1. 報告事項

(1) 事務局報告(事務局長)

会員数報告: 会員総数 306人、正会員 238人、シニア会員 4人、学生会員 64人。

大学院生の会員より、若手研究者の集まる場の問い合わせが増加している。

(2) 各種委員会報告(各委員会委員長)

• 財務委員会より

予算案と決算報告が承認されたことを総会で報告が行われる予定である。

• Web管理・広報委員会より

特に報告事項なし。

• 学会誌編集委員会より

『多文化関係学』第16巻の進捗状況の報告

投稿論文数9件(論文7件、研究ノート2件)のうち不受理1件、辞退1件、不採択6件、採択予定1件。

APA 7th edition が発刊されたが、時期尚早のため、第17巻においては6th editionで編集を継続する方針とする。7th editionの導入に関しては今後検討を進める。

• ニュースレター委員会より

2020年2月発行予定のNL第36号は大会特集号である。担当理事に執筆の依頼がされた。

国立国会図書館オンライン資料収集制度担当より連絡があり、本学会NLがインターネット発行であるため収集対象となり、納入手続きが完了した。

• 選挙管理委員会より

来年度に選挙を実施する。

- 地区研究会
北海道・東北地区:特に報告なし
関東地区:特に報告なし
中部・関西地区:前回の研究会は近畿大学で実施。2020年3月の研究会は日本コミュニケーション学会から共催の提案があり、検討する方向である。
中国・四国地区:特になし
九州地区:2020年2月29日(土)に「多文化共生時代の日本語教育を模索する」(於・九州大学西新プラザ)を予定している。

(3)第18回年次大会準備委員会からの報告(大会委員長)

大会の開催状況に関する報告がなされた。

参加登録者(大会前日時点):90名(会員60人、非会員30人)当日参加者も多数
次回の理事会で、課題(会場費や引き継ぎ等)を協議予定である。

(4)第18回での総会開催の件(副会長)

ランチ総会が開催されることが報告された。

(5)学術委員会および20周年記念

- 第18回年次大会で4回連続のうち2回目のシンポジウムを開催する。趣旨は会員が納得できる本学会の方向性を模索・検討する予定である。
- 特定課題研究は一件あたり、最大10万円に増加したが、会員への周知の検討を要する。
- 学術委員より問題提起や提案があるので今後検討する(1. 本学会で考える多文化関係学とは 2. 知見の蓄積の方法 3. 多文化関係学の手法を探る)

(6)第17回年次大会会計報告(事務局長)

前年度大会委員会から次年度大会委員会への資料の送料は、前年度大会費用に含まれる。18回年次大会委員会に着払いで届いた費用も含めて、修正され、収支報告でも変更されている。

(7)第19回(2020年)年次大会について(会長)

2021年に予定されていた近畿大学で開催する方向。委員長は小坂貴志会員、会場校の窓口は出口朋美会員で始動している。大会テーマは「内なる国際化～5メートル以内の多文化共生」である。

(8)その他

特になし

2.審議事項

(1)2020年3月中部・関西地区研究委員会開催について(中部・関西地区研究会委員長)

日本コミュニケーション学会との共催、また講師は石黒先生(グラウンデッド・セオリーなど手法)に依頼することが検討されている。会場は名古屋外国語大学の予定。

(2)若手からの意見収集について(事務局長)

若手からの意見収集することが承認された。その後、提案された意見を元に若手研究会の開催を検討する予定である。

(3)紀要投稿規定改案について(学会誌編集委員会委員長)

学会誌編集委員会より投稿規定の第5条(研究の倫理性)と執筆要領の第1条(使用言語)の改定案の説明がなされ、承認された。

(4)ブレインライティングについて(大会委員長)

パネルディスカッション「多文化関係と私のつながり」の登壇者の話を受け、参加型のアクティビティであるブレインライティングについての説明がなされた。終了後、各グループで選ばれた項目を大会HPに掲載し学会員に共有する予定である。

(5)基調講演の論文化について(大会委員長)

大会委員長より、基調講演を学会誌に掲載することが提案された。大会の基調講演の論文化については継続審議中である。

以上

地区研究会報告

■北海道・東北地区研究会報告

日時:2019年6月22日(土) 14:00~16:00

場所:藤女子大学 16条キャンパス 374教室

話題提供者: 廣田 廣達(ひろた こうたつ) 氏

テーマ:「中国人から見た日本人—円滑なコミュニケーションを見据えて—」

レスポンドント: 李 鳳(いぼん) 氏(北海商科大学 准教授)

久米昭元(くめ てるゆき) 氏(元立教大学 教授)

今回は、前半部で講演者に話題提供を頂き、後半はパネルディスカッションの形式で実施いたしました。

【講演内容】

華僑の家庭に生まれた廣田氏に中国での駐在経験等を踏まえて、日本人・日本に対する中国人の見方を紹介していただきました。



ご講演の中で特に印象に残ったのは、「中国の人は...」と一括りにできない事はもちろんではあるものの、世代によって、物事の見方に大きく影響を受けた事件や事柄があり、その背景を理解する事で、コミュニケーションがしやすくなる、という事でした。特に文革や一人っ子政策などは世界的にも大きな影響を与えていますが、現在中国の方と接する際にも、これらの出来事を正しく理解しておく事が不可欠であると示していただきました。

また、廣田氏が日中メディアを比較検討された結果、両国とも、メディアはどうしても極端さを求める傾向にあり、実際の人々の意見とは一致していないと分析されたのは非常に説得力がありました。

また、QRコード決済の普及がなかなか進まない日本と、全世代、あらゆる地域で迅速に普及した中国という、新しい技術に対する適応の速度の違いから「なぜ不便さを我慢するのだろうか」という疑問を抱かれています。日本が売りにしているものと少し違う部分が着目されている(医療ツーリズム等)事など、日本が世界にどう見られているかを多面的に知る事の重要性を示していただきました。

【パネルディスカッション】

後半は、パネルディスカッション方式で廣田氏と李氏、久米氏による議論が行われました。李氏からは、メディアの極端さという点については韓国も類似の点が見られ、実際の人々は報道ほどネガティブなイメージがない事、ただし、それを利用する政治家がいるのは事実である、という分析が示されました。久米氏からは、これまでのご研究を踏まえて、日中米でグループでのディスカッションを行う実験の結果、日本ではまとめ役になる人が出ず、他者との討論もあまり起こらなかったが、中国とアメリカはすぐリーダー役が決まり、めいめいが意見を述べて議論するという、近い形が見られたということを示され、決定の早さ(対応の早さ)についてこのようなコミュニケーションの形式の違いも影響しているのではないかという意見が述べられました。



その他、日本と中国の他者との付き合い方の違い、具体的には、中国の方は親族以外でも【親族に等しい存在】がいて、相手にとってその存在になると一つ違う付き合い方になる(日本にはそれを一言で言い表す言葉が見当たらないが、「自己人」と呼ぶ)という等、人間関係の層の違いについても活発な議論が交わされました。

今回の研究会には、学会員のみならず、20名以上の学生さんが出席されました。会場となった藤女子大学では中国での研修も設定されており、その参加予定者が大勢出席していたそうです。自分たちが関わっていく海外に対して、実際の声を聴いて理解したいという積極的な姿勢を感じました。

報告者: 馬場 智子(岩手大学)

地区研究会のご案内

■ 関東地区研究会

日時: 2020年2月15日(土) 13:30~16:00(13時より受付開始)

場所: 成城大学 (<http://www.seijo.ac.jp/access/>)

7号館 725教室(<http://www.seijo.ac.jp/about/map/>)

※ 最寄り駅の成城学園前駅には小田急線新宿駅より「急行」をご利用下さい。

(「快速急行」は成城学園前駅には停車しませんので、ご注意ください)

参加費: 無料

参加者の皆さんとシェアできるお菓子(300円ぐらいまで)をお一人1種類お持ちください。

テーマ: 「多文化に生きる児童・生徒のケア」

話題提供者: 熊本 エリザ (KUMAMOTO, Eliza) 氏

横浜インターナショナルスクール バイリンガルカウンセラー

【内容】

入管法改正から約1年経過しますが、この先、ますます日本にも日本国籍以外の児童生徒が増えれば、対応も多様化することでしょう。今回は、「サードカルチャーキッズ (Third Culture Kids)」(Pollock & Van Reken, 2001) と呼ばれる、両親の国の文化ではなく、育った第三国を自分の文化としている児童生徒や個人に対する理解を深めることを目的とした地区研究会を開催します。今回は、バイリンガルカウンセラーとして長年従事されています熊本エリザ先生をお招きし、インターナショナルスクールに通う児童生徒の事例をご紹介いただきながら、バイリンガルや国際結婚などの Third Culture Kids に対するサポートの取り組みをお話いただきます。日本の学校以上に、多様な児童生徒への対応の歴史があるインターナショナルスクールから多くの示唆が得られることが期待されます。

お申し込みは以下のサイトよりお願いします。

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLScyG9qFX-z710PaY_biCvtJ704Ft_YgDWUSXV9RQlhQ0n9A/viewform?usp=sf_link



【問い合わせ先】

メール: kantomulticultural@gmail.com (全角の@を、半角の@に変更してください)

■ 中部・関西地区研究会

日時: 2020年3月14日(土) 15:00~17:00

場所: 名古屋外国語大学7号館3階(738教室)

〒470-0197 愛知県日進市岩崎町竹ノ山57 代表電話: 0561-74-1111

* キャンパスマップとアクセス情報のURLを以下にお知らせします。

アクセス情報: <http://www.nufs.ac.jp/static/map/access.html>

キャンパスマップ: http://www.nufs.ac.jp/static/map/campus_map.html

参加費: 300円(茶菓代)

テーマ: 「質的データ分析ワークショップ ～M-GTAにおける談話分析の援用～」

話題提供者: 石黒 武人 氏 (武蔵野大学グローバル学部准教授)

【発表要旨】

近年、質的研究のデータ分析において様々な領域横断的な試みが行われ、成果を挙げています。そうした潮流を反映する形で、本発表は、社会(福祉)学的研究で主に使われ、その汎用性を高めている修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)に着目し、M-GTAに談話分析の分析概念(e.g., フレーム、フィッティング)を援用することで、質的インタビューのデータ分析を精緻化する試みの一つを紹介するものです。

具体的には、インタビューで「語られたこと」を整理する言及指示的側面に焦点を当てた分析から、インタビューという相互行為において指標される社会関係、文化、アイデンティティ、すなわち、社会指標的側面の分析に重点をシフトしたアプローチを示し、データ分析をより精緻で立体的なものとし、「厚い記述」へ近接する試みです。

データとして、多国籍のメンバーが所属し、多文化が交錯する国内の組織で働く日本人リーダーに対するインタビュー・データを用い、談話分析の概念を用いずに行う分析と用いた分析とで何が変わるのかを例示します。さらに、短い時間ではありますが、参加者と発表者で実際にデータの分析に取り組み、論理整合的に他領域の分析概念を導入、援用する利点や難点について議論します。

さらに、質的データ分析全般についても意見を交換する予定です。なお、本ワークショップは、多文化関係学会・九州地区研究会(2017年3月)、「言語と人間」研究会・例会(同年11月)、SIETAR Japan・例会(2019年6月)にて提示した内容を修正、発展させたものです。インタビューを用いた質的調査を行いたい方々にとって示唆的な内容となれば幸いです。大学院生の方々も歓迎です。

【発表者略歴】

専門：異文化コミュニケーション学。組織ディスコース研究。M.A. (International Studies, University of Oregon)、修士(異文化コミュニケーション、立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科)、博士(異文化コミュニケーション学、同研究科)。ライフストーリー・インタビュー、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ、談話分析などの質的研究法を研究目的に応じて用い、様々な研究を行っている。論文に「国内で活動する多文化研究チームにおける日本人リーダーの認知的志向性とその動態：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによるモデルの構築」(『多文化関係学』14号, 41-47)、「異文化間の関係構築におけるトランスカルチュラル・アイデンティティの表出構造：映画『グラン・トリノ』において観察されるアイデンティティ・ワークの談話分析」(『異文化コミュニケーション』18号, pp. 15-34.)、著書に『多文化組織の日本人リーダー像：ライフストーリー・インタビューからのアプローチ』(春風社、日本図書館協会推薦図書)、「多国籍チームにみる組織内コミュニケーション：差異とアイデンティティ」池田理知子・埴幸枝(編著)『グローバル社会における異文化コミュニケーション』(pp. 110-119) (三修社)などがある。『グラウンデッド・セオリーの構築[第2版]』の翻訳版(「4章 グラウンデッド・セオリー研究でインタビューをする」の翻訳を担当)が今年刊行される予定である。

【問い合わせ先】

宇治谷 映子(中部・関西地区研究会委員長、名古屋外国語大学英米語学科)

メール:ujitani@nufs.ac.jp(全角の@を半角の@に変更してください) 電話:0561(74)1111(大学代表)

■中国・四国地区研究会

日時:2020年3月8日(日)14:00~16:00

場所:山陽学園大学・山陽学園短期大学(岡山市中区平井1-14-1) DOMUS(110周年記念館)202号

使用言語:日本語

テーマ:Re-thinking “culture” as “difference” in the light of recent findings from Brain Science.

最近の脳科学調査の観点から、「文化」を「差違」として考え直す

話題提供者:Stephen M. RYAN氏(山陽学園大学総合人間学部 教授)

【発表要旨】

The word “culture” is overused and under-defined. Its use has become a barrier to better understanding between people from different backgrounds. This is true not only for our students but also for academic experts who make the study of “culture” the centre of their research activities.

As a result, the speaker will not use the concept of culture to look at the issue of variation in human behaviour. Instead, he will take a neuroscientific approach and ask what we know about how the human brain deals with difference. Drawing on current understanding of the effects of neurotransmitters and the theory of Predictive Processing to construct a view of interactions with people from different backgrounds based on the workings of the human brain rather than of insubstantial and meaningless notions of collective “culture.”

The talk, while of interest to anybody who thinks about human variability, should be of particular interest to people who prepare students to study abroad or who travel overseas themselves.

「文化」という言葉は頻繁に使用する割には定義が曖昧です。むしろ、「文化」という言葉を使用することによって、異なる背景を持つ人々がお互いを理解しようとするときに障壁となっています。これは、学生だけに当てはまることなく、「文化」について研究している専門家にも当てはまります。

そのため、講師は文化という概念を使わずに、人間がとる多様な行動の問題点について神経科学的アプローチによって、人間の脳がどのように違いに対処するか探ります。実体のない「文化」という概念ではなく、人間の脳の働きの観点から、現在の神経伝達物質の効果と予測処理の理論(Predictive Processing)に基づいて、さまざまな背景の人々との相互作用の場を構築します。この講演は、人間の多様性について興味を持っている方だけでなく、留学の準備指導をする方や、海外旅行をする方にとっても特に興味深い内容となっています。

【発表者紹介】

Stephen M. RYAN 氏(山陽学園大学 総合人間学部 言語文化学科 教授)

- Journal of Intercultural Communication 編集部長
- The Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism(多言語・多文化研究)編集部長

【問い合わせ先】

江藤 由香里(中国・四国地区研究会委員長、山陽学園短期大学 幼児教育学科)

メール: yukari_eto@sguc.ac.jp(全角の@を半角の@に変更してください) 電話: 086-901-0571(直通)

■九州地区研究会

日時:2020年2月29日(土)13:00~16:30

場所:九州大学西新プラザ 2階 中会議室

テーマ:「多文化共生時代の日本語教育を模索する~日本語教師は、このままでいいのか?」

話題提供者1:脇坂 真彩子 氏(九州大学)

学習者主導の言語文化学習:タンデム学習の可能性

話題提供者2:深江 新太郎氏(NPO多文化共生プロジェクト)

「聞く協力」とは何か? - 「やさしい日本語」だけでは何が不十分か

話題提供者3:山田 直子氏(佐賀大学)

多文化間教育の観点から見える日本語教育

【内容】

この度、2019年度の九州地区研究会を開催することになりました。国内においては外国人登録者の増加により、様々な問題が顕在化するたびに、「多文化共生」が唱えられてきましたが、状況は一向に改善されてはいないのではないのでしょうか。2019年6月に成立した日本語教育推進法に大きな期待が寄せられている現在、多文化関係学会において日本語教育に焦点を当てる研究会を開催することには大きな意味があると考えます。今回は、3名の講演者に話題提供をいただきまして、その後は、参加者を含めた全員でディスカッションし、活発に交流していきたいと考えております。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

参加を希望される方は、会場準備の都合上、できるだけ事前にお申し込みをいただけますよう、ご協力をお願いいたします。

【問い合わせ先】

小林 浩明(九州地区研究会委員長、北九州市立大学)

メール: hkoba@kitakyu-u.ac.jp(全角の@を半角の@に変更してください)

お知らせ

Web 管理・広報委員会より

《登録事項の更新をお願いします》

■ 会員専用サイトでの所属・住所等の変更

ご所属・e-mailアドレスなど会員登録情報の更新をおねがいたします。会員登録情報の変更は会員各自で行えます。登録情報を更新しなければ学会からのお知らせが届きません。登録情報に変更があった場合は更新をよろしくお願い致します。また、e-mailアドレスについては、現在使用されていないアドレスの方がいらっしゃると思いますので、今一度ご確認ください。なお、IDやパスワードがお分かりにならない方は、畠中 hatankao@hirakata.kmu.ac.jp (全角の@を半角の@に変更してください)宛に御連絡下さい。

■ 登録情報の更新手順

1. 多文化関係学会ホームページ(URL: <http://www.js-mr.org/>)
2. 学会員専用サイト(会員番号・パスワードを入力し、ログインボタンをクリック)
3. 登録情報更新をクリック
4. 変更点を修正し、一番下の更新をクリック

(Web管理・広報委員会委員長:畠中 香織)

学会誌編集委員会より

■ 学会誌編集委員会から「多文化関係学第16巻」発刊に関するご報告

学会誌第16号が完成いたしました。1月中には会員の皆様のもとにお届けできると思います。今年度の投稿論文は全部で10件(内論文8件、研究ノート2件)ありましたが、投稿資格のないものが1件、倫理上の問題点に関しての修正を依頼したところ辞退されたものが1件、締め切り以降の投稿が1件ありました。例年通り査読審査を行いましたところ、残念ながら、今年度は論文1本の掲載という結果になりました。しかしながら、観光という新しい分野への異文化間コミュニケーションからのアプローチを示した論文ですので、ぜひとも一読いただければと思います。

次号(学会誌第17号)は、例年通り投稿論文・研究ノートの受付を行います。次号への締め切りは4月30日(必着)となっておりますので、皆様、奮ってご投稿をお願いいたします。なお、ご執筆・ご投稿を検討いただいております会員の皆様におかれましては、査読および校正の作業を円滑に進めるためにも、執筆・投稿前にぜひとも巻末にあります「投稿規定」ならびに「執筆要領」をご参照いただければと思います。また、本学会誌は「執筆要領第5条」にありますとおり、米国心理学会の規定(APA第6版)に準拠しておりますので(日本語論文は日本心理学会の「執筆・投稿の手引き」を参照)、これらをご参考にいただけますようお願い申し上げます。なお、2019年10月に発行されましたAPAの第7版の取り扱いに関しては、現在、編集委員会で検討しておりますが、第17号の投稿に関しては執筆要領にありますとおり第6版を採用いたします。

今年度も編集作業の軽減を狙って、「投稿規定」ならびに「執筆要領」の改訂を行いましたので、以下の変更点をご確認いただければ幸いです。

(1) 研究の倫理性(投稿規程 第5条)

(2) 使用言語(執筆要領 第1条)

2020年度は、4名の若手の研究者が編集委員会に参加していただけることになりました。この新しい力を得まして、編集委員会の新しい取り組みを検討してまいりたいと考えております。今後とも会員の皆様のご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

■ 2019年度学会誌編集委員会

委員長	金本伊津子(桃山学院大学)
副委員長	岡村郁子(首都大学東京)
委員	クリス オリバー(上智大学短期大学部)
委員	坂井伸影(名古屋大学)
委員	矢元貴美(大阪大学)
委員	叶尤奇(明治大学)
委員	奴久妻駿介(パークレーハウス語学センター)
委員(アドバイザー)	原和也(明海大学)

(学会誌編集委員会委員長:金本 伊津子)

学術委員会より

本学会の創立20周年(2021年)に向けて残すところ2年となりました。20周年記念事業の一環としての年次大会連続シンポジウムに加え、本学会の学術活動のさらなる発展を促す、従来とは一線を画す新規企画を今後は打ち出してまいります。会員の皆様からのアイディアも大歓迎です(本学会の趣旨に叶うテーマであれば、「前衛的な」提案もどんどんお寄せください)。2020年も引き続き、「石井米雄奨励賞」、「特定課題研究」への積極的な応募もお待ちしております。もともと参加したくなる魅力的な学会の展開に向けて、会員の皆様のお力添えをいただけましたら幸いです。

(学術委員会委員長:岡部 大祐)

事務局より

今年の冬は、気温差のある日が多く、体調管理が難しいと思いますが、皆様にはお変わりなくお過ごしでしょうか。

現事務局体制も2期目の1年目を無事に終えることができました。本年度も事務局一同、皆様のお力をお借りしながら、今年も事務局運営を行ってまいりますので、どうぞよろしく願いいたします。以下、事務局からのお知らせです。

■ 事務局所在地について

〒120-0023 東京都足立区千住曙町34-12
東京未来大学 モチベーション行動科学部
田中 真奈美 研究室内:多文化関係学会 事務局
*Eメールアドレス admin@js-mr.org(全角の@を半角の@に変更してください)

■ 会費納入状況に関するお問い合わせについて

本年度より、委託先が変更となりましたので、お知らせします。
お問い合わせは、会費に関する業務を委託しております [株式会社アクセライト](http://www.js-mr.org) jmr@accelight.co.jp
(全角の@を半角の@に変更してください)までお願い致します。その際、メールの件名は「多文化関係学会」とし、ご自分の氏名、会員番号、ご用件をお書きください。
また、退会希望の場合も、会費納入状況の確認と合わせて、[株式会社アクセライト](http://www.js-mr.org)へご連絡ください。
3月末日までにお知らせがない場合は、自動的に会員資格が更新されます。

■ 住所・所属などの変更について

大変お手数ですが、学会員専用サイトにログインし、[ご自分で情報を更新](#)していただくとともに、送付物の住所を管理している [株式会社アクセライト](http://www.js-mr.org)にもご連絡ください。

■ 学会ホームページ「学会員専用サイト」の会員番号とパスワードについて

学会ホームページ(HP) <http://www.js-mr.org/> では、登録情報の更新などを行える「学会員専用サイト」があります。情報の確認及び更新をお願い申し上げます。学会員専用サイトへのログインには、会員番号とパスワードが必要です。お忘れになった方は、[事務局](#) admin@js-mr.org (全角の@を半角の@に変更してください)までお問い合わせください。

■ 学会誌『多文化関係学』バックナンバーの販売について

学会誌の販売は、[株式会社インターブックス](http://www.interbooks.co.jp/)に委託いたしております。学会誌バックナンバーのご購入をお考えの会員の方々は、恐れ入りますが、学会事務局ではなく [株式会社インターブックス](http://www.interbooks.co.jp/)にお問い合わせください。

ホームページ: <http://www.interbooks.co.jp/>
メールアドレス: info_ml@interbooks.co.jp (全角の@を半角の@に変更してください)
電話番号: (03)5212-4652 ファクス番号: (03)5212-4655

なお、学会誌『多文化関係学』の論文は、論文検索サイトJ-STAGEにおいて順次掲載されております。
(事務局長:田中 真奈美)

会員新書紹介

■『マネジメントの父ドラッカーと世界の文豪シェイクスピア』

著者：御手洗 昭治

出版社：産業能率大学出版（¥1,200）

出版年：2019年11月

内容：

ピーター・ドラッカーと言えば「経営の神様」と称されているが、彼の経営思想や組織の人材論やマネジメント論は、シェイクスピアの作品と経営論にも影響されている。経営センスを兼ね備えていたシェイクスピアと彼の作品の愛読家だったドラッカー。二人の生い立ちや経営手腕、分筆家としての姿勢など、二人の巨匠には共通点が多い。本書では、その眼差しの交差点と、現代を生きる知恵を探る。二人の名言・格言は日・英で解説、紹介されている。



新入会員紹介（敬称略、入会順）

会員資格	氏名	所属	研究分野 / 業務内容
正会員	上野 昌之	日本大学	多文化教育、教職教育
正会員	猪口 綾奈		異文化コミュニケーション、日本語教育、英語教育
正会員	大庭 由子		多文化社会におけるアイデンティティ醸成教育
正会員	劉 昊	LEC会計大学院	ニューカマーの教育、異文化間教育
正会員	北 琢磨		日本語教員養成講座
正会員	島田 徳子	武蔵野大学グローバル学部	ワークプレイスにおける異文化コミュニケーション
正会員	川平 英里	立教大学グローバル教育センター	国際教育交流、異文化間教育
正会員	石村 文恵		言語教育
正会員	山崎 めぐみ	創価大学 教職大学院	人権教育、Student Development
正会員	鳥塚 あゆち	関西外国語大学	文化人類学、アンデス先住民社会研究、牧畜文化研究
正会員	須田 栄美子		異文化コミュニケーション・日本語教師

（2019年5月1日から2019年12月31日に入会された方）

ニュースレター委員会より

■ 著作図書案内・書評・海外シンポジウム参加報告記事募集

ニュースレター委員会では、次回36号(2020年6月発行予定)掲載記事として、会員の皆様の著作図書案内、海外シンポジウム参加報告、震災関連や多文化関係学会に関連した研究、関連学会参加報告記事などを募集しております。以下(1)から(3)の記事をNL委員会に送ってくださいますようお願いいたします。

募集する記事の内容

- (1) 学会の趣旨に関連すると思われる著作・訳書などを出された場合
募集対象とする著作の発行時期:2020年1月から2020年4月末まで
書名、著者名、出版社名、出版年、総ページ数と本の内容を200字程度で紹介
- (2) 学会の趣旨に関連すると思われる著作で、会員に広く紹介することが望ましいと思われる場合
募集対象とする著作の発行時期: 2020年1月から2020年4月末まで
書名、著者名、出版社名、出版年、総ページ数と本の書評を200字程度でまとめる
- (3) 学会に関連する海外のシンポジウムや震災関連のシンポジウム、もしくは関連学会に参加された場合
募集対象とする時期: 2020年1月から2021年4月末まで

◆ 記事の送付期日:2020年5月6日

◆ 記事の送付先:NL委員会 内藤 伊都子宛 itnaito@ed.tokyo-fukushi.ac.jp(全角の@を半角の@に変更してください)

■ 関連学会の大会紹介記事の募集

会員に紹介するのにふさわしい関連学会の大会情報を随時募集しております。具体的には、(1)学会名、(2)大会名、(3)大会テーマ、(4)大会日時、(5)会場、(6)その他詳細(120字程度)をお書きのうえ、NL委員会委員長の内藤 伊都子宛 itnaito@ed.tokyo-fukushi.ac.jp(全角の@を半角の@に変更してください)に送ってくださいますようお願いいたします。

(NL委員会委員長:内藤 伊都子)

編集後記

ニュースレター第36号をお届けいたします。今号は、第18回年次大会特集となります。ミルトン・ベネット先生による基調講演や特別講演に関する報告書は、大変読み応えのある内容となりました。ご参加された方にはもちろん、大会に参加することができなかった会員の皆さまにも、当日の様子をお届けできるのではないかと思います。次回の第19回年次大会や今後予定されている各地区研究会、新書などのご案内もありますので、皆さまの研究活動にお役立ていただければと思います。

ニュースレター委員会では、会員の皆さまの研究に役に立つ情報を随時募集しておりますので、“ニュースレター委員会より”をご参考に、記事をお寄せいただければ幸いです。

(NL委員会:内藤 伊都子・守崎 誠一)